

各位

金蘭千里中学校

## 本校入学者選抜試験問題に関するお願い

昨今、教育現場における著作権の在り方が議論されています。本校も、著作権法に基づいた著作物の適切な運用と管理に取り組んでいます。

本校の入試問題の利用につきましても、下記の点にご留意いただき、適切なご利用をお願いいたします。

### 記

1. 本入試問題の著作権は、本校に帰属します。複製の作成は、事前に申告いただいた場合のみ許諾します。

2. 本入試問題で引用している文学作品等の第三者の著作物は、関係団体を通じて、引用の許諾申請を行っています。

以上

# 令和6年度中学入試

## [後期C 入試]

### 国語科 問題

#### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2. この問題冊子は、表紙を含めて 20 ページあります。

試験中に、印刷がはっきりしなかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場

合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。

4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

5. 試験開始後すぐ、大問1のリスニングの音声が流れ始めます。

[後期C 入試] 受験番号\_\_\_\_\_

金蘭千里中学校

【ここにメモをとってもかまいません。】

① 音声をきいて、設問に答えなさい【音声は2回読み上げられます】。

問1

- ア 「箱根八里」の歌では函谷関の險しさを箱根の險しさにたとえている。
- イ 滝廉太郎の「花」で歌われているのは桜の花である。
- ウ 滝廉太郎の「花」で歌われているのは現在の東京にある江戸川の情景である。
- エ 「箱根八里」の歌は箱根越の大変さを悲しげに歌う歌である。

問2

- ア 全部で10の区間に分かれています、往路が1区から5区、復路が6区から10区である。
- イ 往路は小田原から箱根に向けて走ることになり、上り坂を走ることが多くなる。
- ウ 1月2日と3日に行われ、過去には青山学院大学が総合優勝したこともある。
- エ コースの大部分は国道1号線沿いであります、2022年には駒澤大学が総合優勝した。

問3 【選択肢も読み上げられます】

- ア
- イ
- ウ
- エ

問4 【選択肢も読み上げられます】

- ア
- イ
- ウ
- エ
- オ

②次の文章を読み、後の問い合わせに答えなさい。問題に字数制限のあるものは、すべて句読点や記号も一字とする。

極東に位置する日本は大昔から、中国でできあがつた文化や技術の一番いいところを自分たちの暮らしのなかに取り入れてきました。自己で苦労して一から生み出さなくとも、となりの隋や唐などに行けば欲しいものを見つけることができました。日本は「必要なものがあつたら、すでにいいものを持っている国から持ってきて真似る方が aコウリツ的だ」ということを何百年という時間をかけて学んでしまったのです。

その結果、「新しいものを一から生み出すまでには、どんなにたくさんの一X」があり、その「X」から学び取った知識やノウハウが蓄積されているか」ということに気づくこともなく、自分でちゃんと考えようともせずに「結果だけ真似すれば事足りる」という傾向が強くなつたのだと思います。

さらに江戸時代が終焉を迎える頃から、この傾向はより強くなつていきます。  
明治維新以来、日本は当時の先進国である欧米列強に追随し、その文化や経済、科学技術などあらゆる面で、そのまま真似することが国を進歩させることだと信じるようになりました。

確かに、その成果として、当時の日本は目覚ましい発展を遂げました。しかし、一方で、できるかぎり短期間で真似することを重視するあまり、日本独自の文化や文明を築き上げるための創造性についてはbケイシされました。結果、明治維新以降の日本では、創造性を育むような努力は行われず、そのような文化や環境も整いませんでした。

明治維新はほかにも弊害をもたらしました。  
「前に「こうすればうまくいく」と決められたことは疑わず、何も考えず、そのままやるのが一番いい」という文化をつくつてしまつたことです。

この「決められたことをしていればいい」という文化は、その後の日本の「教育」に色濃く影響しました。

今的学生が受けていいる教育の大半は「自分で考えるのではなく、とにかく先生の言うことを聞いて勉強すること」を求めます。その教育を受ける現場である学校の試験問題には必ず正解があり、その正解に早く到達できたひとが良い成績をおさめて、試験に合格することになります。

つまり、①日本の小・中・高・大学の受験のほとんどが「優等生の選抜試験」になつているのです。

ただ、「優等生」とは言つても、残念ながら「自分の頭で考えて創造性のある成果が出せる優れた人材」ではありません。「言われた通りの勉強方法で大量の正解を暗記できた記憶力の良い生徒」という意味です。

このような教育のもとで育つた優等生たちは、自分の頭で考えることはあまりなく、ただ、頭は「メモリー」として利用され、膨大な知識が詰め込まれています。

大学の入試試験では、求められた答えを「暗記した知識や問題の解き方」のなかから探し出せるかどうかが肝心となります。考える力ではなく、記憶力の良し悪しが問われ、機械的に暗記した膨大な知識や解き方をできるだけ早くAアウトプットできる学生が大学入試の勝者となり、卒業後、その学歴を評価されて、社会に出てからも（注1）枢要なcチイを占めることになります。

学校の先生にとつても、教えた生徒が偏差値の高い有名大学に入つてくれるとき自分の評価も高まります。結局、生徒たちは、先生から言われるままに、記憶力を試す傾向にあるテストの点数を少しでも多くとれるように、知識や問題の解き方といった『正解』を暗記することだけに力を注いでしまい、「自分の頭でちゃんと考える」という基本さえ失つていくのです。

## ②私は「知識」には二種類あると考えています。

書かれたことや教えられたことを他人事として暗記した【Y】とも言える「表面的知識」と、自分事として自身の体験から身をもつて学んだ「体験的知識」です。

受験では、暗記した解答や問題の解き方などの「表面的知識」をいくつ憶えているかが重要になります。しかし、社会に出てから求められるのは、暗記した何百もの解決法についての「表面的知識」ではなく、直面した問題それぞれに解決法を組み合わせて応用させるための「体験的知識」の方です。

学生のみなさんも社会に出ると思われるこになりますが、世の中のあらゆる仕事において、学校で勉強した「正解」という唯一の答えが通用するケースはほとんどありません。

学生のなかには、暗記中心の教育に興味が持てず、先生から見えないところでB舌を出しているひともいるでしょう。しかし、学校ではどうしても「試験ができてdヨウリヨウのいい子」が先生に重用されます。そういう生徒が重用されればされほど、暗記中心の勉強に疑問を持つ生徒たちは、学校での勉強を諦めるようになります。だからと言って「自分の頭でちゃんと考ること」も教わらないので、そちらもできないます。

暗記した記憶を思い出すだけで答えが出てしまう入学試験をやっているかぎり、③「自分の頭でちゃんと考ることができない人間」の再生産がどんどん進んでいくことになるのです。

(中略)

私が子どもだった時代、竹や木で細工した玩具を作るため、ナイフは（注2）必需品でした。ほとんどの子どもたちが、ナイフを上手に使っていました。ところが、いつの間にか「ナイフを使って、指など切つて怪我したらたいへんだから」と、だんだんナイフを使つた授業は減つていき、現在は家でも学校でも、子どもたちがナイフを使う機会がほとんどなくなつてしましました。

結果、子どもたちがナイフで手を切る事故もなくなり、一見、安全な生活が保証されたようになります。

しかし、裏を返せば、今の子どもたちには「④ナイフで手を切るという小さな失敗を経験する機会」がなくなつてしまつたのです。そして、ナイフで手を切つたことのない子どもは、その痛みも、傷が後からどうなるかも知らないので、実際にナイフがどれほど危険なもののか、知らないまま成長してしまいます。すると、いざナイフを使わなければならなくなつたとき、ちゃんと使いこなせないばかりか、失敗して大きな怪我を負うことになるかもしれません。ナイフで切つた痛みを知らないことで、他人をナイフで切つたり刺さりしたりしたときの痛みも想像できなければ、痛みを知つている人よりは、eアンイにナイフを他人に向けることにもつながりかねません。

つまり、子どもの頃にナイフに触れる機会を失つたことで、後に大きな失敗を起こす可能性が高まるのです。

小さな失敗が起つたリスクを徹底的に排除し続けることは、将来に起つりうる大きな失敗の可能性を高めてしまうことになるのです。

現在主流となつてゐる「これは成功、それは失敗」「こつちはオーケー、あつちはダメ」という○×式の教育方法では、表面的な知識しか学べません。そこに欠落している「⑤真の理解」がないままだと、決して応用力を身につけることはできません。〃ムダ〃を省いた合理的な教育や勉強法は、コウリツ的な学習を実現しやすいですが、それはあくまでも暗記を中心とした表面的知識の蓄積であつて、体験的知識に基づいた「自分で考える力」の養成には役立たないので、そのような現代の教育方法の弱点についても、きちんと考えなければなりません。

あえて必要と思われる失敗を体験させることで、子どもたちは自分自身でその失敗から体験的知識を学び、判断力や応用力を獲得するのです。

そう考へると、やはり実感を伴つた体験学習が重要になります。失敗を恐れない気持ちを育み、失敗体験を積極的に活用する教育が今こそ必要なのです。

(畠村洋太郎『やらかした時にどうするか』より 一部改めたところがある)

(注1) 枢要な……物事の中心となる。

(注2) 必需品……あることをするのに欠かせない物。

(一) 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a コウリツ

b ケイシ

c チイ

d ヨウリヨウ

e アンイ

(二) 二重傍線部 A・B の言葉の意味としてもつとも適切なものを次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A 「アウトプット」

ア 理解

イ 出力

ウ 記憶

エ 変換

B 「舌を出している」

ア 困っている

イ 恥ずかしがっている

ウ ばかにしている

エ 悲しんでいる

(三) 【X】に入るのにもつとも適切な言葉を、本文から二字で抜き出しなさい。

(四) 【Y】に入るのにもつとも適切な言葉を次の中から一つ選び、傍線部のカタカナを漢字に直して書きなさい。

・ヤケイシに水

・机上のクウォン

・ヒヤクブンは一見にしかず

・タザンの石

・高みのケンブツ

(五) 傍線部①「日本の小・中・高・大学の受験のほとんどが「優等生の選抜試験」になつてゐる」とあるが、その説明としてもつとも適切なものを次のア～ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本の教育では、自分の頭で考えることができない優等生が多数を占める一方で、少數の創造的な優等生がいつも不利な立場に立たされているということ。

イ 日本の教育では、とにかく先生の言うことを聞いて勉強することを求めてゐるが、実は自分の頭で考えることができる優等生だけが合格をもらえるシステムになつてゐるということ。

ウ 日本の教育では、自分で答えを出せるかどうかが重視されており、先生も、自分の頭で考えて答えに至るような優等生ばかりを育ててゐるということ。

エ 日本の教育では、正しい答えにたどり着くために、先生から言われた通りの勉強を続け、用意された正解に早く到達できる優等生が良い成績を残せるということ。

オ 日本の教育では、「決められたことをしていればいい」という文化のもと、優等生のように決まりきった内容だけをひたすらに暗記することを義務付けられているということ。

(六) 傍線部②「私は「知識」には二種類あると考へています」とあるが、二種類の「知識」についての例としてもつとも適切なものを次のア～ウの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

#### (1) 「体験的知識」の例

ア 本を読んでいて学んだ内容が、身近な生活にも生かされていることを知り、実際に体験したかのような感覚になつた。

イ キャンプを通じて自然に触れるという体験をしたことで、火をつける際の木の組み方を、自分でアレンジできるようになつた。

ウ 大人になって自分が過去に体験した勉強を思い出し、もう一度学んでみようという興味を覚え、新たな知識を増やした。

(2) 「表面的知識」の例

ア 授業で学んだ地球温暖化について取り上げた新聞を読んで、同じような環境問題が地球規模で表面化していることを知った。  
イ 仲の良かった友達との関係が悪くなってしまったが、周りが心配するといけないので、ひとまず表面上は仲良くするようになつた。  
ウ 実際の植物のしくみについて自分で目にしたわけではないが、教科書で見た内容だけはとにかく表面的に暗記して覚えた。

(七) 傍線部③「自分の頭でちやんと考えることができない人間」の再生産がどんどん進んでいくことになる」とあるが、なぜそのように言えるのか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 暗記した内容を思い出して答えを書くような生徒が良い成績を残すばかりで、「自分の頭で考える」訓練をする機会がないから。  
イ 暗記中心の教育に興味を持てない生徒が「自分の頭で考える」機会を奪<sup>うば</sup>われた結果、勉強自体の無意味さを説くようになるから。  
ウ 暗記した正解を思い出すだけで答えが出てしまうような簡単な入学試験を、日本以外の国も取り入れはじめるから。  
エ 暗記が得意な生徒が評価されればされるほど、暗記の勉強が苦手な生徒たちも、学校で暗記の勉強をすることを強いられるから。  
オ 学校で先生から大事にされる「試験ができるかしこい子」が、自分の頭で考えることを嫌<sup>いや</sup>がりながら勉強を続けるから。

(八) 傍線部④「ナイフで手を切るという小さな失敗を経験する機会」とあるが、筆者はこの機会を通じてどのような結果が得られると述べているか。次のア～オの例から、作者の主張と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 危険なナイフを使うという経験をしたことで、いざというときも安全に刃物<sup>はもの</sup>を使いこなすことができる子どもが増える。  
イ 失敗して怪我を負うことになつた経験から、生活の他の場面でも、起こりうる危険を事前に予測して行動するようになる。  
ウ 子どもが怪我をしないようにという反省から、ナイフを使わなくとも済む工夫<sup>くわう</sup>がなされ、子どもがナイフで手を切る事故が減る。  
オ ナイフで手を切つたことのない子どもが、実際にナイフがどれほど危険なものなのかを学び、成長するようになる。

(九) 傍線部⑤「眞の理解」とあるが、筆者の言う「眞の理解」に関する説明として、もっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本の教育は優等生が暗記を繰り返すだけの作業に成り果ててしまっているので、実感を伴った体験学習を積ませることで、失敗を恐れない気持ちを育み、失敗から再びチャレンジすることができるような人材になつてこそ、本当の「理解」が生まれる。

イ 子どもたちは、あえて必要と思われる失敗を体験させることで、自分自身でその失敗から体験的知識を学び、判断力や応用力を獲得することができるので、大人が子どもたちを教える際は、自分が過去に学んだ知識をきちんと「理解」させてやらなければいけない。

ウ 小さな失敗が起こるリスクを徹底的に排除することは、逆に将来起こりうる大きな失敗の可能性を高めてしまうことになるため、子どもたちには小さな失敗の価値を「理解」させる教育が必要なのであり、成功する体験は必ずしも重要ではない。

エ ムダを省いた合理的な教育や勉強法は、短期速成の学習を実現しやすいが、それはあくまでも暗記を中心とした表面的知識の蓄積であつて、体験的知識に基づいた自分で考える力の養成には役立たないので、多少のリスクを負つたとしても、体験を経た「理解」をしておくことが、長い目で見れば重要である。

オ 現在の日本で主流となつてている教育方法では、表面的な知識しか学ぶことができず、そこに欠落している体験的な知識がないままだと、応用力を身につけることはできいため、きちんとした成功体験を積むことによつて、「理解」したことを応用する力を養うことが大切である。

③次の文章を読み、後の問い合わせに答えなさい。問題に字数制限のあるものは、すべて句読点や記号も一字とする。

「それなんですか」安斎は強い声で訴えた。「その野球教室でお願いがあつて」

安斎が考え出したのは、失敗した絵画作戦よりもさらに大それた計画だった。（注1）プロ野球選手を巻き込もうというのだ。

「同級生のことを褒めてもらいたいんです」安斎はA単刀直入に言い、そこに至り僕も、①彼の閃いた計画について想像することができます。

「褒める？」

「明日、野球教室をやる時、うちのクラスに草壁<sup>(くさかべ)</sup>って男子がいるんだけど、彼のスイングを見たら、『素質がある』って褒めてあげてほしいんです」

「それは」選手は言いながら、頭を整理している様子だった。「その草壁君のために？」

「そう思つてもらつて、a力<sup>(あくり)</sup>まいません」安斎は曖昧<sup>(あいまい)</sup>に答えた。厳密に言えば、草壁のためではないからだろう。

翌日の野球教室<sup>(おもよひにんじゅ)</sup>のことを思い浮かべる。草壁がバットを振り、久留米が、「上手ではないな」と感じる。「やはり、草壁は何をやっても駄目<sup>(だめ)</sup>だな」と再確認する。もしかすると実際に口に出し、「草壁のフォームは駄目だ」と言う可能性もある。そこで選手がやってきて、コメントをする。「君はなかなか素質があるよ」と。

すると、どうなるか。先入観がひっくり返る。

安斎の目論みはそれだろう。

「その、誰君<sup>(だれくみ)</sup>だっけ」

「草壁です」

「草壁君は、野球をやっているの？」

僕と安斎は顔を見合させた。「野球は好きみたいだけど」一緒に野球をしたこともなかつた。

「どうなんだろう」

「草壁を今、連れてくれば良かつたな」

「でも、とにかく、草壁を褒めてあげてほしいんです」安斎は言つた。雨で濡れたランドセルを背負つたままの僕たちは、車内をずいぶん狹<sup>(せま)</sup>くしていたが、選手は嫌な顔もせず、ただ、少し苦笑した。

「もちろん、褒めてあげることはできるけど」

「できるけど？」

「嘘はつけないから。素質があるとかそんなに大きなことは言えないよ」

「素質があるかなんて、誰にも分からないと思いませんか」安斎は粘り強かつた。「だつたら、嘘とは限らないですよ」

選手は困惑を浮かべた。それは、小学生相手に厳しい現実を教えることをためらっていたのだろう。

「俺もプロだから、少しは分かるつもりだよ。素質や才能は一目瞭然だ」

「じやあ、少し褒めるだけでも」安斎はさらに食い下がり、そうだねそれはもちろん吝かではないよ、という言質を取り、ようやく少し安堵した。

それから僕たちは、安斎の家の近くでタクシーから降りた。選手は、「じやあ、また明日」と優しい声をかけてくれた。

野球教室の日は晴れた。「日ごろの行いが良かつたから」と校長先生はB典型的な言い回しを口にし、「どうして大人はよくそう言いたがるのかな」と疑問に感じたが、とにかく前日とは打って変わり、快晴だつた。

午前中の二時間、希望する子供はバットを持ち、校庭に出て、選手の指示通りに素振りの練習をした。

担任教師たちのいく人かは腕に覚えがあるのか、子供たちにまじりバットを振った。久留米もその一人で、いつも真面目な顔でチョークを使っているだけであるし、体育の授業でも笛を吹く程度であつたから、運動が得意な印象はなかつたのだが、学生時代は野球部で鳴らしていたというのも嘘ではなかつたらしく、美しい姿勢で素振りを披露した。

「久留米先生、恰好いい」と女子から声が上がり、②僕と安斎は顔を見合わせ、なぜか面白くない気持ちになつた。

安斎も、僕と似たり寄つたりの、情けないスティングをしていたが、途中で、「加賀、校庭でみんなでバットを振つてるのは何だか変だよな」と言つた。

「新しい体操みたいだ」

「みんなで振り回して、電気でも起こしている感じにも見える」

(注2) 打点王氏は真面目な人だつたのだろう、形式的にふらふらと歩き回り指導のふりをするのではなく、一人一人のフォームを見ては、肘や膝を触り、丁寧にアドバイスをした。

僕たちのいるあたりには、一時間もしてからやつと来た。

打点王氏は、僕と安斎に気づくと顔を少しひくつかせた。前日、タクシーに乗り込んだ二人だと分かったのだ。「昨日はどうも」と挨拶する様子で、笑みも浮かべた。「どれ、振つてごらん」と声をかけてくる。

僕は、うん、とうなずき、バツトを力マえたが、「うん、じやなくて、はい、だろ」と横から指摘された。見れば久留米が立っていた。スポーツウェア姿も様になり、打点王氏の隣に立つと、コーチのように見える。

「はい」僕は慌てて、言い直す。ろくな素振りはできなかつたが、打点王氏は笑うことなく、「もう少し、顎を引いてごらん」とアドバイスをしてくれた。「体の真ん中に芯があるのを意識して」

はい、と答えてバツトを振ると、僕自身は変化が分からぬものの、「うん、そうそう」と褒められる。安斎も、僕と似たような扱いを受けた。

そして、だ。安斎がいよいよ本来の目的に向かい、一步踏み出す。「久留米先生、草壁のフォーム、どうですか」と投げかけたのだ。久留米はbフイに言われたため、小さく驚き、同時に、草壁がどうかしたのか、と醒めた表情も浮かべた。草壁がいること自体、忘れている。ケハイすらあつた。

草壁は、僕たちのいる場所から少し離れたところにいたが、打点王氏が近づいていくと緊張のせいなのか、顔を真っ赤にした。

「やつてごらん」打点王氏が声をかける。

草壁はうなずいた。

「うなづくだけじやなくて、返事をきちんとしなさい」久留米がすかさず注意をした。

草壁はびくっと背筋を伸ばし、「はい」と声を震わせた。

あたふたしながら、バツトを一振りする。僕から見ても不恰好で、バランスが悪かつた。腕だけで振っているため、どこか弱々しかつた。

「草壁、女子じゃないんだから、何だそのフォームは」久留米の声は大きくはないのだが、低く、あたりによく聞こえる。近くにいた子供たちが、「草壁、女子みたいだつて」と言い、土田か誰かが、「クサ子」と囁いた。安斎が舌打ちをするのが聞こえた。久留米がC意図的に言つたとは思わぬが、確かに、そういつた発言により、他の子供たちが、□③節はある。

安斎は縋るような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか？」と、草壁の名前をはつきりと発音し、昨日の依頼を想起させるようになつた。

打点王氏は眉を少し下げ、口元を歪めた。このスウイニングを褒めるのは至難のわざ、と思ったのかもしれない。

「よし、じやあ草壁、もう一回、やつてみなさい」久留米が言つたが、そこで安斎が、「先生、黙つてて」と言い放つた。

久留米は、自分に反発するような声を投げかけた安斎に、目をやつた。自分に向けられた槍の切っ先の形を、じつと確認するかのようではあった。むつとしているかどうかも分からない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安斎の目には力がこもり、声も裏返っていた。

「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」

「先生」あの時の安斎はよくも臆せず、喋り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやつても駄目みたいな言い方はやめてください」

「安斎、何を言つてるんだ」

「子供たち全員に期待してください、とは思わないんですけど、駄目だと決めつけられるのはきついです」

安斎は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。立ち向かうと肚を決めたのが分かり、僕は気が気ではなかつた。打点王氏のほうはといえば、大らかなのか鈍感なのか、安斎と久留米との間で起きる火花を気に掛けることもなく草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振つてみようか」と言つた。

はい、と草壁は顎を引くと、すつとカマえた。先ほどよりは強張りがなく、脚の開き方も良かつた。

④先入觀を、と僕は念じていた。そのバットで吹き飛ばしてほしい、と。

もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスイングを披露し、その場にいる誰もが呆気に取られ、いちやく学校の人気者になる、といつたd gekiテキな出来事が起こると期待していたわけではなかつた。むろん、そのようなことは起きなかつた。草壁の一振りは、先ほどの腰碎けのものに比べればはるかに良くなつていたが、目を瞠るほどではなかつた。

安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。

腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やつてみよう」と言う。

こくりとうなずいた草壁がまた、バットを回転させる。弱いながらに風の音がした。

「君は、野球が好きなの？」打点王氏が訊ねると、草壁はまた首だけで答えかけたが、すぐに、「はい」と言葉を足した。

「よく練習するのかな」

「テレビの試合を観て、部屋の中だけど、時々」とぼそぼそと言つた。「ちやんとは、やつたことありません」

「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体を捻り、安斎と僕に一瞥をくれ、久留米とも視線を合わせた。その後で、草壁の肘や肩の位置をe シュウセイした。

草壁が素振りをする。

ずいぶん良くなつたのは、僕にも分かる。同時に、打点王氏が、「いいぞ！」と大きな、透明の風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した。まわりの子供たちからの注目が集まる。

「中学に行つたら、野球部に入つたらいいよ」打点王氏は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉を口にした。「君には素質があるよ」と。

自分の周囲の景色が急に明るくなつた。安斎もそうだつたに違ひない。白く輝き、肚の中から光が放射される。報われた、という思ひだつたのか、達成した、という思いだつたのか、血液が指の先にまで辿り着く、充足感があつた。

草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやつた。「本当ですか？」

久留米がどういう顔をしていたのか、僕は見逃していた。もしかすると、見てはいたのかもしれないが、今となつては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱に染まっていたが、それは恥ずかしさよりも、気持ちの高まりのためだつたはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁を【i】一台詞を発したかもしれない。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、【ii】のはやめてください」

「安斎はどうして、そんなにムキになつてているんだ」久留米が冷静に、淡淡といなす。

「でも草壁君、野球ちやんとやつてみたらいいかもよ」佐久間がいつの間にか、僕たちの背後に立つていた。「ほら、プロに太鼓判押されたんだから」

草壁は首を力強く縦に振つた。

恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。あれは、乗りかかつた船、の気持ちだつたのだろうか。それとも、先生と安斎とのやり取りから、嘘をつけ通すべきだと判断したのか、そうでなければ、草壁の隠れた能力を実際に見抜いたのか、いやもしかすると、豪放磊落の大打者はあまり深いことは考えていなかつたのかもしれない。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きっといい選手になる」と付け足した。

久留米はそこでも落ち着き払つていた。「何だかそんな風に、【iii】てもらつてありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。「草壁、おまえ、本気にするんじゃないぞ」とも言つた。「あくまでもお世辞だからな」念押しする口調が可笑しかつたからか、数人が笑つた。場が和んだといえば、和んだが、わざわざそんなことを言わなくとも、と僕は承服できぬ思いを抱いた。

「先生、でも」草壁が言つたのはそこで、だ。「僕は」「何だ、草壁」

「先生、僕は」草壁はゆっくりと、「僕は、そうは思いません」と言い切つた。

安斎の表情がくしやつと歪み、笑顔となるのが目に入るが、すぐに見えなくなつた。なぜなら、僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑つていたからだ。

(伊坂幸太郎「逆ソクラテス」より 一部改めたところがある)

(注1) プロ野球選手 (注2) 打点王氏……この「プロ野球選手」は打点王のタイトルを獲得したので「打点王氏」と呼ばれている。

(二) 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a カマ (いません)      b フイ      c ケハイ      d ゲキテキ      e シュウセイ

(二) 二重傍線部 A 「单刀直入」、B 「典型的な」、C 「意図的に」の意味をそれぞれ次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |          |              |               |             |
|----------|--------------|---------------|-------------|
| A 「单刀直入」 | ア なんの前置きもなしに | イ 相手の顔色をうかがつて | ウ いきなり頭ごなしに |
| B 「典型的な」 | エ 反論を許さないよう  | オ 気さくで無遠慮に    |             |
| C 「意図的に」 | ア あたりまえの     | イ あやふやな       | ウ もつたいぶつた   |
|          | ア だしぬけに      | イ ことさらに       | エ ありきたりの    |
|          |              | ウ ひかえめに       | オ とりとめもない   |
|          |              |               | エ とつさに      |
|          |              |               | オ ひとりでに     |

(三) 傍線部① 「彼の閃いた計画」とはどのようなものなのか。次のア～オの中から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア プロ野球選手に草壁をほめてもらうことで、草壁をクラスのみんなに認めさせること。

イ プロ野球選手に草壁をほめてもらうことで、草壁に自信を持たせてやろうとすること。

ウ プロ野球選手に草壁をほめてもらうことで、久留米の草壁に対する考え方を変えること。

エ プロ野球選手に草壁をほめてもらうことで、久留米の野球に対する考え方を変えること。

オ プロ野球選手に草壁をほめてもらうことで、野球をやってみたいとみんなに思わせること。

(四) 傍線部② 「僕と安斎は顔を見合わせ、なぜか面白くない気持ちになつた」とあるが、その理由として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 風爽とバットを振る久留米先生の横で、情けないスイングをする自分が、先生を引き立て役にしたように思えたから。

イ 運動が不得意そうな久留米先生が上手にバットを振っているのを見て、「僕」と「安斎」は出し抜かれたような気持になつたから。

ウ 美しい姿勢の素振りを披露することで、久留米先生に歓声が上るのは、「僕」と「安斎」にとつては苦々しいことだから。

エ 体育の授業で笛を吹く程度であつた久留米先生が、実は野球も得意だと知り、久留米先生にはとてもかなわないと思ったから。

オ 生徒のための野球教室なのに、野球部で鳴らした久留米先生が得意そうにしゃしやり出てくるのは卑怯だと憤りを感じたから。

(五) □③にあてはまる言葉として、最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 草壁のことを見直してやつてもよいと思つている イ 草壁のことを下位に扱つても良しと決めている

ウ 草壁を女子と同等に扱つても良いか迷つている エ 久留米先生に気に入られたいと願つている

オ 久留米先生に逆らつてはまずいとおびえている

(六) 傍線部④「先入観」の内容を次のような形で表した。(1)には人物名を記し、(2)には文中の十二字の言葉を抜き出して答へなさい。

(1)が(2)と考へてゐるということ。

(七)【i】～【iii】にふさわしい言葉を次の語群からそれぞれ選び、必要があれば文中に合う形に直して答へなさい。

語群「うちとける・持ち上げる・あてはめる・いとおしむ・たしなめる・決めつける・うろたえる・おびやかす」

(八)次のア～カはこの小説を読んで生徒たちが述べたものです。本文の解釈として不適切なものを二つ選び、記号で答へなさい。

ア どうやらこの話は、主人公の「僕」が過去の出来事を回想して書かれているようだね。「僕」の同級生に「安斎」「草壁」それから「佐久間」といった人物が登場しているわ。

イ 僕は最初「久留米先生」も同級生の一人だと思つていたよ。だつて「久留米」と呼び捨てにしているからね。

ウ それは「久留米先生」に対する「僕」や「安斎」の反感から来たものだろうね。どうもこの先生は、「草壁」に対する当たりが強いね。こういう先生の態度がクラスの生徒に波及していくさまがリアルに描かれていたよ。

エ そんな風潮に待つたをかけたのが「安斎」だったのよ。彼は目的遂行のために躊躇なく進んでいく大胆な生徒で、その行動力についていけない「僕」がうんざりしているように思えたわ。

オ 確かに、「久留米先生」の考え方を変えようとする「安斎」の意気込みは相当なものだね。実際、野球教室の一件から「久留米先生」は「草壁」に対する見方を変えたようだしね。

カ 私は「草壁」の変化に注目したわ。最後の場面で「草壁」が言つた言葉「僕は、そうは思いません」は、先生の思い込みを決して受け入れないぞという強い気持ちが表れていて感動したわ。

【問題は以上で終わりです。】



令和六 中入 国語 「後期C」 解答用紙

金蘭千里中学校

問1
問2
問3
問4

①

(七)	(五)	(四)	(二)	(一)
			A	a
(八)	(六)	(1)	B	b
	(九)	(2)	C	c
			d	d
			e	e

②

(八)	(七)	(六)	(三)	(三)	(一)
	i	2	1		
	ii				
	iii				
			(四)	B	
			(五)	C	
				d	
				e	

③

得点	
受験番号	

令和六年 中入 国語 「後期C」

【解答】(120点満点)

① (20点)

問1 イ ウ  
問2 エ イ  
問3 ウ  
問4 イ・エ

(1つ間違いで3点、2つ間違いで0点)

② (50点)

(一) a 効率 b 軽視  
(二) A イ B ウ  
(三) 失敗

(四) 机上の空論  
(五) エ  
(六) (1) イ (2) ウ  
(七) ア  
(八) ウ  
(九) ハ

c 地位 d 要領 e 安易

(三) 失敗

(四) 机上の空論  
(五) エ  
(六) (1) イ (2) ウ  
(七) ア  
(八) ウ  
(九) ハ

c 地位 d 要領 e 安易

(九) ハ

(一) a 構 (いません) b 不意  
(二) A ア B エ C イ

(三) ウ  
(四) ウ  
(五) イ

c 気配 d 劇的  
e 修正

③ (50点)

〔解答〕

(一) a 構 (いません) b 不意  
(二) A ア B エ C イ

(三) ウ  
(四) ウ  
(五) イ

c 気配 d 劇的  
e 修正

(六) 1久留米先生  
(七) i たしなめる  
(八) エ オ

2草壁は何をやつても駄目だ  
ii 決めつける  
iii 持ち上げ  
※順不同

③ ③ ④ ④ ④ ④ ③ ②  
× × 2 3 × 5

⑤ ⑤ ⑤ ④ ⑤ ③ ③ ③ ②  
× 2 × 2 × 5

⑤ ⑤ ⑤ ⑤